

温暖化は大敵

1, ウラギンシジミの越冬

翅の裏面が銀色の鱗粉に覆われていることから、ウラギンシジミとよばれています。幼虫はフジやクズの蕾(つぼみ)を食べ、成虫は春から秋まで見られます。9~10月頃に一番目立ち、樹冠でキラキラしたものがみえる時はたいてい本種です。成虫で越冬しますが、越冬場所が最も目につきやすいチョウです。雨や雪を防げるカシやサザンカなど常緑樹の葉裏に止まっていますので、歩いているとき緑の中の白が目立ちます。



ウラギンシジミ

昆虫の越冬は、温度変化の無い場所を選ぶのが普通ですが、ウラギンシジミは気にしていないようです。冬でも暖かい日差しがあると体温が上がり、活動します。蜜などの無い時期、活動するということは体力を消耗して春まで生き残れません。地面に落ちて死んでいる個体を見ることもあります。暖地性のチョウなので、寒さへの対応ができていないのかもしれませんが、暖かい冬は逆に危険なのです。

2, サクラの冬芽

冬枯れの樹木の芽の中は、すでに春の準備ができています。サクラの冬芽をカミソリで切って断面をルーペで見ると、写真のように薄い葉片が重なっているだけの芽と、中心部に丸い塊と葯(やく)がみえる芽とあります。前者を葉芽、後者を花芽と呼びます。外見でも下の写真のように2つの芽の違いはわかり、丸みをおびているものが花芽です。暖かくなればこれらが成長するのですが、夏前にはすでに花芽の形成は始まり、落葉前には完成しています。



葉芽の断面

春になれば自動的にこれらの芽が成長するわけではありません。



ソメイヨシノの花芽と葉芽

成長開始のスイッチが必要なのです。その条件は、休眠(細胞分裂など生命活動の停止)することと、低温に一定時間置かれることです。花芽ができて春まで開花しないのはこの条件が整わないためです。一般に生物は5℃以下になると活動が止まります。ソメイヨシノでは、この温度以下の時間が延べ900時間必要とされています。冷え込む時間の少ない鹿児島は、より北の地点よりソメイヨシノの開花が遅くなります。春に花が咲く植物にとって、冬の寒さは大切なことです。温暖化が進むと子孫を残せない植物が増えてくる可能性があります。



花芽の断面